

第十四回 齋藤茂吉短歌文学賞

藤岡武雄『書簡にみる齋藤茂吉』

短歌新聞社

選考委員

委員長 岡野弘彦

委員 尾崎左永子

佐佐木幸綱

高野公彦

高橋睦郎

(五十音順)

藤岡武雄『書簡にみる斎藤茂吉』(抜粋)

大正二年九月十日 相州三浦三崎向ヶ崎 北原白秋様

青山自宅より茂吉書簡(古泉千樫との寄書)

御ぶさたいたしました。御たよりありがたく拝誦いたしました。あれをアララギ来月号に出す事を御ゆるし下さい。ただ今古泉君と一処に話してゐます(茂吉) スバルの真珠抄くりかへして読んでゐます。私共も、何とかしなければなりません(茂) 七月三十日夜に居て、左千夫先生死去報を(古泉君からの)読み、久保田赤彦の家に走りました。その時蛍を殺したのです(茂)

「左千夫先生死去報を読み」とあるのは、大正二年七月三十日脳溢血で亡くなった報せの電報のことで、茂吉は上諏訪町の布半旅館に滞在していて丁度、湯槽に入っていた時であった。

「夜の十一時過ぎであつただろう。僕は一湯浴みて寝ようと思つて、いい気持になつて浴槽に浸つてゐた。そこへ女中が『電報がまゐりました』といつて持つて来た。『どれ見せろ』といつて、浴槽の中で眼を近づけて見ると『チカシ』といふ打名がある。その瞬間に僕はアララギに関して何か要事が起つたに相違ないと思つた。しかるに、なかをあけると『サチヲセンセイシンダ』という文句である。もう夜半を過ぎてゐる。僕は赤彦君

のところへ駈け出した。途中で人力車にのつて高木村に着いたのは一時を余程過ぎてゐる。」と記されている出来事である。

また「久保田赤彦の家に走りました。その時蛍を殺したのです」という歌が、「悲報来」十首の歌である。

ほのぼのとのおれ光りてながれたる蛍を殺すわが道くらし
すべなきか蛍をころす手のひらに光つぶれてせんすべはなし

茂吉の歌集『赤光』は、大正二年十月十五日発行である。その『赤光』に対して、白秋は「赤光拝誦、涙こぼれむばかりに存候。純朴不二、信実にして而かも人間の味はひふかき兄が近業のごときは当代にまたとあるべくも無之候。兄は万葉以来の人、赤光は礼拝仕るべき歌集なり。小生のごとき不純鈍才の徒は寧ろ慚死すべきのみ。幸に御自愛下されたく候。なほあらためて心より真実なる尊敬を兄にささぐ。以後深く兄に親しみたし。無礼御ゆるし下され度候。」(大正二年十一月十七日三崎にて)と書き送っている。

●選考委員による選評

選評

岡野弘彦

齋藤茂吉が、友人や恋人や息子に宛てた書簡を中心に置き、その周辺の情況や、短歌作品、関連資料を丹念に検討し、折々の茂吉の思慮、行動を精査して、その人間像をとらえようとした労作である。

類書にしばしば見られるような、私的興味にとらわれたり、偏向を持ったりすることなく、大歌人齋藤茂吉の人物像を正面からとらえ、合せてその時代の歌壇の特質や、短歌作品創作の秘奥の問題の解明に資する点が大きい。

茂吉没後五十周年の記念すべき年の賞にふさわしい研究成果を示す著作である。

永年の研究成果

尾崎左永子

茂吉没後すでに半世紀、いま再び茂吉の人と作品を改めて見直す気運が動きはじめている。その中で『書簡にみる齋藤茂吉』の受賞は大きな意味をもつと思う。超え難い巨巖としての茂吉は、今までとかく、自分にとっての茂吉、という視点から描かれ易い面があつたが、藤岡氏は膨大な資料を渉獵し、私的書簡を分析検証しながら、可能な限り客観的な接近を試みている。人間像を彫り上げながらむしろそこに一種の節度を与えた研究者の敬虔さがあるのに注目し、共感した。永年の研究による充実した成果として味わい深い。

読みの深さ

佐佐木幸綱

藤岡武雄氏は、67年刊『年譜齋藤茂吉伝』以来、齋藤茂吉にかかわる多くの精密な研究書、多くの示唆に富む論文・評論を発表して来られた。私なども、氏の研究にずいぶん教えられてきた。

このたびの賞の対象となった『書簡にみる齋藤茂吉』も、継続的に果たしてこられた氏の茂吉研究の一環で、これまでの研究成果の上に立っての深い書簡の読み込みが大きな特色となっている。たとえば、島木赤彦、古泉千樫の章に見られる「アララギ」の人間関係に触れた書簡の読み込みなど、藤岡氏ならではのものである。本賞にふさわしい一冊と思う。

水面下の茂吉

高野公彦

書簡といふのは、原則として他人の目を意識せずに書かれてをり、したがって書き手の内面があらはに出て来たり、また書き手と相手との関係がストレートに現れたりする。茂吉の場合は特にさうした傾向が強い。残された数多くの書簡には、いはば「水面下の茂吉」が濃厚に息づいてゐる。

だから、書簡を通して茂吉の言動を辿つてゆけば、作品だけでは探ることのできない茂吉像が浮かび上がってくるだらう。藤岡武雄氏のこの大著は、まさにそれを実行し、実現したものである。方法は実証的であり、態度は公平であり、この一冊は後代の茂吉研究者にとつても益するところ大である。

歌は手紙

高橋睦郎

相聞と言ひ、恋歌と言ひ、和歌はほんらい魂から魂へ送られる手紙だった。膨大な歌を残した茂吉はまた、膨大な手紙を残している。「書簡にみる斎藤茂吉」に私は、明治・大正・昭和を貫く近現代第一等の歌人茂吉が、同時に万葉から新古今へとつづく歌の黄金時代に通底する大歌人であることを、改めて教えられた。それはまた、没後五十年を経て茂吉の歌のところが私たちの魂になまなましく届く理由でもある。茂吉生誕百二十年、没後五十周年という記念すべき年にふさわしい受賞と思う。

第14回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

藤岡 武雄 (ふじおか たけお)

大正15年2月、山口県生まれ。静岡県三島市在住。昭和15年、父・江原青島の指導により作歌を始め、「心の花」に入会。山口高等師範学校、日本大学文理学部を経て、日本大学大学院で齋藤茂吉の研究に専念。日本大学短期大学部助教授等を経て、平成9年まで日本大学教授。歌誌「あるご」主宰。平成8年から日本歌人クラブ会長。

歌集

「うろこ雲」(昭和32年)、
「心の窪み」(昭和49年)、
「千畳敷」(昭和53年)、
「雲の肖像」(昭和60年)、
「千枚原」(平成4年)、
「富士百景」(平成9年)、
「一本の樹」(平成13年)、
「茂吉一代記」(平成14年)

研究書

「年譜齋藤茂吉伝」(昭和42年)、
「評伝齋藤茂吉」(昭和47年)、
「若山牧水」(昭和56年)、
「伊藤左千夫」(昭和58年)、
「歌人愛の世界」(昭和60年)、
「書簡にみる齋藤茂吉」(平成14年)
ほか多数。



受賞の言葉

藤岡武雄

齋藤茂吉の伝記研究については、色々の角度からスボットをあてて書き、すでに『年譜齋藤茂吉伝』(昭42)『評伝齋藤茂吉』(昭47年)等八冊ばかり出版しておりますが、たまたま昨年、十年間にわたって歌誌「短歌現代」に連載しておりました中から、最も茂吉と深くかかわった人達六名を収めた『書簡にみる齋藤茂吉』を刊行しましたところ、第十四回「齋藤茂吉短歌文学賞」を受賞することとなった。長い間、茂吉の研究をしている者として、受賞は大変うれいことである。私の茂吉研究のきっかけは、作歌を始めた昭和十五年、丁度刊行された茂吉歌集『暁紅』を手にして、艶なる茂吉の歌に取りつかれた。今思うと永井ふさ子との恋愛中の歌集であった。その後、日本大学大学院時代から茂吉研究を続けて五十年になろうか、最初に手をつけたのは、詳細な年譜づくりであった。私は、かねてから大歌人茂吉を捉えるには、創作主体を明らかにしてこそ、作品を深く解釈・鑑賞できるものと考えており、とくに短歌は一人称の文学であるからこそ、可能であると考えている。そういった意味からも、書簡は第一級の資料であり、伝記研究に織り込んだものである。選考に当られた方々、支持して下さった方々に心から感謝申し上げます。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不織書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社
第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房
第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内
TEL・〇二三一六三〇一―二二四八